

Philophthalmus 属による眼球寄生の一例

佐藤 千歳^{*1}、鍋田 裕司^{*2}、富岡 政江^{*3}、佐々木 瑞希^{*4}、中尾 稔^{*4}、宇賀 昭二^{*5}

【はじめに】眼球検査時に発見される寄生虫として東洋眼虫や回虫、旋尾線虫などが主に挙げられるが、今回、吸虫類の *Philophthalmus* 属による眼球寄生症例を初めて経験したので報告する。

また、本症例は文献や症例報告が大変少なく、検査当初虫体鑑別に非常に苦慮したが、寄生虫学会のコンサルテーションを利用することによって、同定することができた。

【症例】①患者：60代女性。既往歴：左急性結膜炎。現病歴：左結膜炎が再発したため、再受診。診察時、濾胞を伴った結膜炎が認められ、球結膜に左右にゆっくり動く虫体が認められた。②虫体所見：長さは3mmほどで、色は乳白色から半透明、詳細な観察では、2か所の吸盤、腸管、子宮（虫卵様物質）および管様の突起を認めた。③虫体鑑別：虫体所見より吸虫類が強く疑われたが、詳細な同定には至らなかった。そこで、寄生虫学会のコンサルテーションを依頼し、*Philophthalmus* 属と推定されるとの回答をいただいた。また、種の鑑別のため遺伝子検査を実施することとなった。

【まとめ】今回我々は、世界で数例しかない、極めて稀な *Philophthalmus* 属の眼球寄生を経験した。*Philophthalmus* 属は、主にトリの結膜に寄生する吸虫類であるが、ヒトも終宿主となりうる。眼球への寄生では顕著な臨床症状は起こさないとされているが、濾胞性結膜炎を引き起こすとの報告もあり、これは今回の症例とも合致した。このような稀少な症例を報告していくことは極めて大事なことで、また臨床で隠れる寄生虫症例を見つけ出すことも必要だと実感した。当初に虫体を扱った検査センターではタンパク質等のゴミと判断されていたが、1人の臨床検査技師の機転で、最終的には稀少症例の同定にまで至った。今後は、臨床検査におけるこのような課題にも取り組んでいきたい。